

## オーラル・コミュニケーションに関する調査・研究 ーティーム・ティーチングの評価方法に関してー

広島県立安芸府中高等学校 上西 幸治

### 1. はじめに

英語指導助手（以下、ALT）の導入とともに、日本人英語教師（以下、JTE）は、話す力、聞く力を伸張することに重点を置いた教育の推進をしてきた。更に、オーラル・コミュニケーションの授業が始まって、ALTとともに様々な実践を行ってきた。しかし、近年聞く力と話す力の伸張とともに、コミュニケーションを図ろうとする姿勢の育成などにも重点が置かれるようになった。それに伴い、英語教師は、相手と意志疎通を図ろうとする姿勢の育成にも目を向けながら、学習者の英語力を伸ばす実践をしてきた。そして21世紀には新しい学習指導要領が高校に導入され、その中では「実践的コミュニケーション能力」の育成が提唱されている。英語教師として、ALTとの授業をさらに充実したものにするためにも、今後一層の創意工夫が必要となると信じる。

さて、ALTと行うオーラル・コミュニケーションを評価する教師は、現実にはどのように評価を行っているのであろうか。個々の教師がそれぞれの考えで生徒を評価している現実があるのは事実であろう。その実態を少し突き詰めていく必要があるように思う。

今回の調査は、オーラル・コミュニケーションの授業（特にティーム・ティーチング）に関して、英語教師が実践している評価方法並びにその評価内容を調査し、その分析に基づいてよりよいオーラル・コミュニケーションの評価を目指し、今後の英語教育に役立てようとするものである。

### 2. 評価に関して

#### 2.1 評価方法

オーラル・コミュニケーションの評価方法に関しては、現場の教師から様々な意見や考えが提示されている。とはいえ、どのようにオーラル・コミュニケーションの授業評価をしていくかについては、現場の教員が苦慮しているところである。特に、個々の生徒の各学期末あるいは学年末での評価を出す際に、今まで通りのテストが大半をしめる形での評価を出していくことでよいのか否かについて、試行錯誤を繰り返しているのが現状である。

特に、コミュニケーション重視の評価をしていく際には、コミュニケーションのための英語力と情意面の2つの側面の評価をしていく必要がある（佐野1995, 高塚

1992)。その2つの側面でも、軽視されがちな情意的な側面の評価に注目したい。情意的側面には積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、地道に努力する姿勢、学習への意欲などが評価すべき内容として含まれよう。つまり、ペーパーテストのように明確な数値化ができないとって評価しないのではなく、勇気を持って生徒をしっかりと観察することにより、到達度の度合いを見極める姿勢を教師が持つべきである。また、日常的に授業実践で行うことが可能な形成的評価を十分に生かした総括的評価を、学期末などの区切りの評価の際に行うべきでもある(内藤1993)。そのことによって、生徒を幅広く評価することが可能となる。その結果、生徒の学習意欲が高まり、英語の授業に対して前向きな姿勢が表出し、英語力向上に繋がると考えられる。

上記のことを鑑みれば、形成的な評価や正確な数値では示しがたい面接試験、口頭試験などを総括的な評価の中に組み込むことが必要といえる。その意味で、実践されているオーラル・コミュニケーションの授業評価を改めて見直し、学習者にとって学習意欲をより高め、英語力の向上にも一層つながる適切な評価をしていくことが肝要となる。

## 2.2 評価方法の実践

授業の評価に関して、各英語教師がそれぞれの工夫をしながら生徒を評価している。ここにその実践発表されたものの一端を記述したい。

まず一つの例は、山口県の光丘高等学校(1997)の実践である。その学校では、オーラル・コミュニケーションAを実施しているが、その評価内容は以下の通りである。

筆記試験、面接試験、平常点の3つの視点で評価し、その割合は、それぞれ6割、2割、2割である。その評価の中に、どのようにALTを参加させているかは明瞭ではないが、面接試験や平常の評価をALTとJTEが協力して行っていると考えられる。

また、リスニングの点数を5割と定め、残りの5割を授業中生徒が発表する様子を見て評価する方法をとっているところもある(田中1996)。後者の5割には、授業内の生徒の学習意欲、積極性などを評価している。

次に実際の評価として、定期テスト(リスニングを含む)とObservation(自己・相互評価、教員間のコンセンサス)5割としているところもある(小林1999)。この場合は、自己評価や相互評価を実際的评价にどの程度、どのように導入していくか十分に考慮する必要があるといえる。とはいえ、自己評価に関してはそれを実際的评价に組み入れることが可能であるという研究もある(Griffiee 1988)。

筆者の実践したオーラル・コミュニケーションの評価(上西1999a)においては、その評価割合として、リスニング4割、オーラル・プレゼンテーション4割、授業内評価2割である。この授業内評価には、授業での参加度、自主性・積極性及び学習への意欲などの評価を含んでおり、日常的に授業内外でのきめ細かいチェックが要求される。

また、畠山(1999)は、その評価割合に関して、定期テスト7割、テスト以外(授業観察・面接・ロールプレイなど)3割としている。数値には表しにくい定期テスト

以外の部分を評価しようとする教師の熱心な実践が報告されている。

### 3. 目的・方法

#### 3.1 目的

- (1) オーラル・コミュニケーション（特に、チーム・ティーチング）授業の実態を把握し、今後のよりよいオーラル授業のあり方を模索していく
- (2) チーム・ティーチングの評価について、様々な意見を収集し、よりよい評価方法の模索をしていく

#### 3.2 調査方法

調査方法は、広島県内の35人の県立高等学校のJTE（基本的にALTの常駐校を中心）を抽出し、アンケート( Appendix1)を送付した。ALTに関しては、ALTが常駐している学校を基本にして、20人に送付した。その結果、半数を越える回答（JTE 19人、ALT 11人）が得られた。

### 4. 結果と考察

#### 4.1 評価方法への満足度

	<JTEの回答>	<ALTの回答>
とても満足	1人	1人
やや満足	16人	5人
やや不満	1人	2人
とても不満	0人	0人

全体的に評価方法に関して、双方とも満足していることが窺える。多少不満に思っている教師の理由としては、以下のようなものがあげられる。

- ・授業の参加度（積極性・意欲を含む）をもっと評価すべきだ（JTE）
- ・個々の生徒の英語力のつき方をもっと評価すべきだ（JTE）
- ・あらゆる面でもっと時間をかけるべきだ
- ・評価を協力して行うべきだ
- ・基本的な質問をしながらもっと評価すべきだ
- ・テストは最後の評価とすべきだ

#### 4.2 評価割合

オーラル・コミュニケーション授業、特にALTとのチーム・ティーチングを行っている授業の学期末及び学年末の評価方法について、以下の通りとなった。（ ）の人数はOCBのみの人数である。

- 定期テストのみで評価 2人（1）
- 定期テスト以外の部分は参考程度評価 3人（2）
- 定期テスト以外の部分は1割程度評価 1人
- 定期テスト以外の部分は2割程度評価 3人
- 定期テスト以外の部分は3～4割程度評価 10人（1）

この結果を見る限り、ティーム・ティーチングを行う授業に関しては、19人中10人の教師が、定期的に行う中間・期末テスト以外に、3～4割程度テスト以外の評価方法を導入している。アルク編集部の実態調査では、授業とテストの両方で評価している教師が、7割弱を占めている。テスト以外の割合については、明瞭ではないがある程度の割合をいわゆるテスト以外の部分で評価していることが分かる。筆者のデータ結果では、オーラル・コミュニケーションという授業の内容そのものを鑑みて、評価方法を工夫している教師の姿を見ることができる。

#### 4.3 評価内容

定期テスト以外の部分を評価に入れていると答えた教師に、その評価内容について尋ねてみた。その結果、以下の回答が得られた。(複数回答可)

英語を話そうとする積極性	12人(1)
スピーキングテスト(面接、発表など)	12人(2)
ノート、プリント等の提出物	12人(2)
英語の授業に臨む姿勢	7人(2)
授業以外の英語に取り組む姿勢	2人

上記の結果で分かるように、よく採用されている評価項目は、「英語を話そうとする積極性」「スピーキングテスト」「ノート、プリント等の提出物」の3項目であった。

まず、かなりの教師が、授業中に積極的に英語を話そうとする生徒の姿勢を各学期の評価の中に盛り込んでいる。これは、文部省の学習指導要領に見る「外国語で積極的に意志疎通を図ろうとする態度の育成」に焦点を当てて、教師自身が学習者の態度の育成を積極的に評価しようという姿勢の現れであると考えられる。

ノート、プリント等の提出物を評価に入れている教師も多い。ある意味で、授業の中で学習したことを評価する1つの手法であろう。現実には、英語学習の中で前向きでない生徒を何らかの形で評価しようとするときに使うことができる方法である。

また、スピーキングテストを導入している教師も同様に多い。当然のことではあるが、オーラル・コミュニケーションの中で話す力の伸張も目的の一つとして行っているわけであるから、その成果を見る、つまり評価をしていくことが必要となる。

この中でも、生徒のスピーキング力を評価していると回答した教師に対して、その評価方法を具体的に述べてもらった。一番多かったのが、面接試験である。12人中8人がALTとのインタビューをすることで、生徒のスピーキング力を評価している。その場で生徒の話す力をかなり明瞭に評価できるので、よく取り入れられているようだ。ただ、この評価方法の問題点は、かなりの時間を必要とすることである。この時間的な問題点があるが為に、面接試験の評価方法に二の足を踏んでいる教師もいる。

次に、多かった項目はオーラルプレゼンテーションである。12人中5人がこの方法を取り入れている。それに続くのがペアのダイアログ発表(3人)、教師の質問に対する回答(3人)であった。

また、オーラル・コミュニケーションのテストと4技能の関係について述べたい。

リーディング、リスニング、ライティング、スピーキングの4技能をどのような割合でテストに盛り込んでいるかに関してアンケートで尋ねた。

テストは、全体的にリスニング中心で行われている傾向がある。興味深いのは、4技能の中で、1人を除いて全ての教師がライティングとリスニング部門のテストを必ず実施していることである。もう一つは、全体的に見て、4技能を評価に組み込もうとする姿勢があることである。生徒のコミュニケーション能力の向上を図る上でも4技能を見ようとする教師の姿勢が窺える。

#### 4.4 評価者

実際に、教師は生徒の学習評価をどのように行っているのでしょうか。ALTとJTEがうまく協力して評価しているのでしょうか。この疑問に関する質問を行った。アンケートの結果は、以下の通りとなった。

##### <JTEの回答>

- 全てJTEが評価する 5人
- JTEが中心でALTの意見は聞く(参考にする)程度 1人
- JTEが中心で、ALTの評価は1、2割程度見る 3人
- 双方が対等の立場で評価する 9人
- ALT中心 1人
- \*部門別に評価協力が変わる(cf. SpeakingはALTのみ等) 1人

##### <ALTの回答>

- 全てJTE 6人
- JTE中心でALTの評価は参考程度 3人
- JTE中心でALTの評価はある程度加える 1人
- 対等の立場で評価 0人
- ALT中心 0人

評価の問題に関しては、チーム・ティーチングで指導した内容と大いに関連がある。指導内容がおきまりのテキストのみを使ったものであったなら、リスニングテスト中心でALTが評価に参加しがたい状況になるように思える。指導内容をもっと充実させ、ALTが評価に加わることができる実践を続けていくことが肝要と考える(cf. 畠山1999、上西1999a)。

ここで注目すべきことは、JTEとALTの評価に対する意識の差が大きいことである。約半数のJTEは、彼ら自身の中にALTと対等に評価をしていると思っている。一方、ALTの側にはJTEと対等に評価しているという意識はほとんどなく、JTEがほとんど全ての評価を行っていると思っている。ALTの関わりは授業のプランや実践をすることが大半で、学期末での総括的評価には関わりを持つことができていないのが現実のようだ。

チーム・ティーチングに関する国立教育研究所(1996)の全国的な調査によれば、チーム・ティーチングで実施したことを評価として組み入れていない高校教師

は、全体の4割に近いという。教師が自分たちが指導した内容を評価に反映していない現実がある。また、評価に組み入れていると答えた教師の中でも、信じがたい事が露呈している。それは「ALTの関わり方」に関する問いにおいて「ALTは評価にほとんど関わっていない」という回答が、高校では5割に達しているということである。つまり、たとえ指導内容を評価に組み込んでいたにしても、2人に1人のJTEは、ALTを正当な生徒の評価者として参加させていないことになる。ALTの関わり方はまことに不十分と言わざるをえない。

また、アルク（1996）の調査では、「OC教育における評価にあたってALTの意見はどの程度参考にされますか」という質問項目に対して、以下のような結果が出ている。

- 参考意見として受け止めるのみ 35%
- 一応重視する 33%
- かなり重視する 32%

この結果を見ると、3割の教師はALTの意見を一応聞くが、評価に組み入れることはしないことを意味している。また、「一応重視する」と回答した教師が3割いるが、この「一応」という言葉の幅の広さに疑問が残る。「一応」という言葉の中には、ALTの意見として尊重するが、しかし実際の評価には組み入れられないという含みの教師もかなりいることが考えられる。「かなり重視する」と回答した教師は、いわゆるALTをJTEとほぼ同等レベルの評価者として扱っていると考えられる。しかし、残念ながら約3割の教師しかALTをJTEと同レベルの生徒の評価者として扱っていないことになる。

ALTが評価に関わっていると答えたJTEに、その関わり方について尋ねた。その結果、以下の回答があった。

- ・授業のあらゆる活動の中で対等に評価する
- ・オーラルプレゼンテーションや英作文を対等にあるいはALT中心で評価する
- ・クラスの半数ずつ受け持ち個別にインタビューする
- ・ALTがテスト作成に参加し、評価する
- ・英文日記、スキットテスト等の評価を対等にする
- ・参加態度などを点数化して評価する

#### 4.5 評価者及び評価方法の模索

「オーラル・コミュニケーション（チームティーチング）の評価はどうするのが一番よいと思いますか」という問いを通して、JTEとALT双方の評価への関わり具合について尋ねた。

	<JTEの回答>	<ALTの回答>
全てJTEが評価する	1人	0人
JTEが中心でALTの評価を加味する	4人	1人
JTEとALTが対等の立場で評価する	12人	8人
その他	0人	0人

ALT、JTE双方とも、チームティーチングの評価をするのであるから、ALTが何

らかの形でより多く評価に関与することが必要と考えているようだ。しかし、残念ながら現実には、ALTは実際の評価に十分に関与しているとは言い難い。より最終的な評価にALTに参加してもらうためにも、お互いの意志疎通をより図り、よりよい関係(rapport)を築いて、JTEは積極的にALTと協力した評価ができるように推進することが肝要である。

考えられるオーラル・コミュニケーションのよりよい評価方法について、ALTに自由記述で尋ねたところ以下の回答が得られた。

- ・面接法や基本的な会話の質問をすることがあげられるが、時間がかかりすぎる
- ・授業での発話や積極性を評価する
- ・課題提出や生徒の向上度の評価等が先で、テストは最後とする
- ・協力(協調)して評価する

## 5、まとめ

今回実施したオーラル・コミュニケーションの調査によれば、評価に関して以下のことがいえる。

- (1) 全体的にはALT、JTE双方とも評価方法には満足している
- (2) 様々な工夫をしながら、定期テスト以外の評価を3,4割組み入れている教師が多い
- (3) JTEはALTを評価者として対等に扱っているつもりであるが、ALTはそうは思っていない
- (4) とはいえ、双方とも協力して対等の立場で評価をすべきだと思っている

生徒一人一人を評価するのは、実際に教えている教師であるが故、それぞれの現状に合わせて評価基準を策定するのが妥当であろう。その評価割合は、各教師が実践する授業、つまり、生徒の状況と教師が焦点を当てた指導内容や方法によって異なるといえる。その点を鑑みれば、各教師が独自の創意工夫を続けながら、評価も考えていかななくてはならないといえよう。

ただ評価者としてのALTに関しては、ALTをただ単にアシスタントとして扱うのではなく、畠山(1999)に見るように、JTEのパートナーとして様々な状況で積極的に評価に関与させていき、協力して生徒の評価をしていくことが肝要と考える。ALTにうまく活躍の場を与えることができればできるほど、生徒が授業の中でより生き生きとしてくることになるであろう。つまり、共同して評価をすることはコミュニケーションを重視した授業が成功へのステップを着実に踏んでいくことに繋がると考える。

オーラル・コミュニケーションの評価に関しては、それぞれの授業実践や評価内容を尊重しながら統合的評価という方法になるであろう。つまり、実践例や今回の調査内容にもある通り、英語授業に対する姿勢、発話部門(スピーキング力)、定期テスト(特にリスニング中心のテスト)等をうまく統合した形の評価となるように思える。その際に注意したいことは、可能な範囲でプラスの評価つまり加点法による評価を教師自身が積極的に推進する必要があることだ。

今回の調査は、調査対象者もそれほど多くなく、不十分なものであることは否めな

い。しかしながら、ALT、JTE 双方の評価に対する意識や評価方法の中身について、私たち英語教師に提言するものを含んでいると考える。今後もよりよいオーラル・コミュニケーションの実践と評価を目指して努力していきたい。

#### 参考文献

- Brumby S. & Wada M. 1990 *Team Teaching* Longman
- Griffiee T. Dale 1998 Classroom Self-Assessment — A Pilot Study *JALT Journal*, Vol. 20, No.1 115-125
- Ministry of Education, Science, and Sports and Culture 1994 *Handbook for Team Teaching* ぎょうせい
- Richards, Jack C. & Lockhart, Charles 1994 *Reflective Teaching in Second Language Classroom* Cambridge University Press
- Smith, C. Richard 1995 「日本の英語教育における外国人教師のこれからの役割」『現代英語教育』6月号, 16-17 研究社
- Wada M. & Cominos A. 1994 *Studies in Team Teaching* Kenkyusha
- 青木昭六 1985 『英語の評価論』大修館
- アルク編 1996 「OC実態調査アンケート調査速報」『英語教育事典 オーラル・コミュニケーションの成果を問う』, 17-24 大修館
- 安藤昭一・小田幸信他 1991 『英語教育現代キーワード事典』増進堂
- 上田明子 1993 「OCを教室で教えるということの意味」『英語教育』11月号 11-13 大修館
- 上西幸治 1999a 「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるための学習、特にティーム・ティーチングの指導と評価のあり方について」平成10年度教育実践推進事業に関わるグループ研究発表会資料
- 上西幸治 1999b 「ティームティーチングに関する調査・研究 —ALTとJTEの意識を比較して—」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.29, 39-47
- 大分県高等学校英語教育研究グループ編著 1989 『英語指導助手との協同授業の進め方』山口書店
- 小林順子 1999 「教科書プラスワンのOC授業の工夫」第25回全国英語教育学会問題別討論会「オーラル・コミュニケーションの指導と評価」資料
- 佐野正之 1995 「評価のあり方 —「締めくくり」か「出発」か—」『英語教育』7月号26-28 大修館
- 神保尚武・酒井志延 1995 『英語教育』別冊「オーラル・コミュニケーションのためのデータ・バンク」大修館
- 高塚成信 1992 「学習意欲を高める評価とは」『英語教育』3月号29-31大修館
- 高梨庸雄・卯城祐司・アダチ徹子 1999 「21世紀における日本の英語教育」『英語教育』4月号44-45 大修館
- 田中洋史 1996 「話す意欲と聞く姿勢を引き出す授業」『英語教育事典 オーラル・コミュニケーションの成果を問う!』32-34 アルク
- 内藤 徹 1993 「オーラル・コミュニケーションBにおけるテストと評価」



- 『現代英語教育』9月号25-27 研究社
- 畠山喜彦 1999 「Team Evaluation — JTEとALTが共同で取り組む評価の試み—」  
第25回全国英語教育学会北九州研究大会発表資料
- 山崎陽子 1997 「OCBの評価アラカルト」 『英語教育』7月号17-19 大修館
- 山口県立光丘高等学校英語科 1997 「OCAの評価アラカルト」 『英語教育』7月号  
14-16 大修館
- 渡邊寛治 1996 「JET Program(me)の現状と課題」 『現代英語教育』9月号, 9-11  
研究社
- 和田 稔 1996 「AET導入と日本の英語教育」 『現代英語教育』9月号, 6-8  
研究社
- 1997 「AETに学ぶこと・覚えてほしいこと」 『英語教育』3月号17-19  
大修館

## Appendix 1

### アンケート (抜粋)

<次はテスト及び評価の問題についてお聞きします>

1、オーラル・コミュニケーション授業におけるTeam-Teaching (T-T) の評価について、形成的評価(授業中の生徒の意欲・積極性などプロセスを評価)と総括的評価(定期考査などの評価)がありますが、あなたはどのように学期末の成績を評価していますか。該当するもの1つに○をつけてください。

- ( ) 定期テストのみで評価
- ( ) 定期テストで評価するが、他の部分(普段の授業態度・積極性、面接試験等)の評価は参考程度
- ( ) 他の部分(普段の授業態度・積極性、面接試験等)の評価は、1割程度加味
- ( ) 他の部分(普段の授業態度・積極性、面接試験等)の評価は、2割程度加味
- ( ) 他の部分(普段の授業態度・積極性、面接試験等)の評価は、3割~4割程度加味
- ( ) その他( )

2、定期テスト(筆記試験)以外の部分を評価に入れると答えた人にお聞きします。学期末の成績の中にどんな点を明確な評価として入れてありますか(どの組み合わせで評価していますか)。該当するもの全てに○をつけてください。

- ( ) 授業中、英語を話そうとする積極性 ( ) 英語の授業に臨む姿勢
- ( ) 授業外の英語学習に対する姿勢 ( ) プリント、ノートなどの提出物
- ( ) スピーキングテスト(面接試験、発表など)

その他( )

3、上記の質問で、スピーキングテストを評価の一つに入れていると答えた人にお聞きします。どんな方法でその力を評価していますか。(複数回答可)

- オーラルプレゼンテーション  ペアでダイアログ発表  
 決められた英文の暗唱発表  教師の質問に対する回答による評価  
 面接試験 (ALTとのインタビュー形式)

その他 ( )

4、一般的に、オーラル・コミュニケーション (T-T) 授業のペーパーテストの出題内容はどのようにしていますか。該当するものに○をつけて、4技能のおよその割合を ( ) に書いてください。

- リーディング部門  割  リスニング部門  割  
 ライティング部門  割  スピーキング部門  割

5、スピーキングを評価に導入していないと答えた人にお聞きします。今後、スピーキングを評価に入れる 予定がありますか。

- はい  いいえ

6、5の質問で、「いいえ」と答えた人にお聞きします。その理由は何ですか。該当するものに○をつけてください。

- 主観が入りすぎるので、評価するのが難しい  客観性に乏しい気がする  
 明確な点数に出きないから その他 ( )

7、オーラル・コミュニケーション授業の評価方法に満足していますか。

- とても満足している  やや満足している  やや不満である  
 とても不満である

8、不満に思っている人にお聞きします。どんな評価方法がよいと思いますか。

( )

9、全体的に、評価はどのようにしていますか。該当するもの1つに○をつけてください。

- 全てJTEが評価する  
 JTEがほとんど中心で、AETの意見は聞く (参考にする) 程度  
 JTEが中心で、ALTの評価を1、2割程度加味する  
 ALTとJTEが対等の立場で評価する  ALTが中心で評価する

その他 ( )

10、ALTが何らかの形で、評価に関わっていると答えた人にお聞きします。どんな点に、どのように関わっているのですか。

- (例) オーラルプレゼンテーションで、生徒のスピーキング力を対等に評価している  
( )

11、オーラル・コミュニケーション (T-T) 授業の評価は、どうするのが一番よいと思いますか。

- 全てJTEが評価する  JTEが中心で、ALTの評価を加味する  
 ALTとJTEが対等の立場で評価する

その他 ( )